13　　姉と語らう　　　　　　　　　　　　　　　文法 注意したい訳し方の助動詞③

読解　登場人物の主張をつかむ

新傾向　関連する資料との対応をつかむ

月いみじくなくかきに、みな人も寝たる夜中ばかりに、縁にでゐて、姉ⓐなる人、空をつくづくと㋐ながめて、「ただ今①なく飛びせなばいかが思ふべき」と問ふに、なま恐ろしと思へるけしきを見て、に言ひなして②笑ひなどして聞けば、かたはらⓑなる所に、先追ふ車とまりて、「の葉、荻の葉」と呼ばすれど答へⓒざなり。呼びわづらひて、笛をいとをかしく吹きすまして、過ぎぬⓓなり。

Ａ　笛ののただ秋風と聞こゆるになど荻の葉のそよとこたへぬ

と言ひたれば、㋑げにとて、

Ｂ　荻の葉のこたふるまでも吹きよらでただに過ぎぬる笛の音ぞ憂き

かやうに明くるまでながめⓔあかいて、夜明けてぞみな人寝ぬる。

* 語注

先追ふ車＝道の前方にいる人々を追い払いながら進む貴人の車。

荻の葉＝隣の家に住む女性の呼び名。

秋風＝（雅楽の一つ）が掛けてある。

【原文】

月いみじく隈なく明かきに、みな人も寝たる夜中ばかりに、縁に出でゐて、姉なる人、空をつくづくとながめて、「ただ今行方なく飛び失せなばいかが思ふべき」と問ふに、なま恐ろしと思へるけしきを見て、異事に言ひなして笑ひなどして聞けば、かたはらなる所に、先追ふ車とまりて、「荻の葉、荻の葉」と呼ばすれど答へざなり。呼びわづらひて、笛をいとをかしく吹きすまして、過ぎぬなり。

　笛の音のただ秋風と聞こゆるになど荻の葉のそよとこたへぬ

と言ひたれば、げにとて、

　荻の葉のこたふるまでも吹きよらでただに過ぎぬる笛の音ぞ憂き

かやうに明くるまでながめあかいて、夜明けてぞみな人寝ぬる。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

〔　　　〕が〔　　　　〕に明るい〔　　　〕を見ながら恐ろしいことを言う。隣の家に〔　　　〕が止まって〔　　　〕を吹きながら家人を呼ばせる声がしたので〔　　　〕と歌を交わし、夜が〔　　　　〕るまで起きていた。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（㋐は終止形でよい）。〈４点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ〜ⓔについて、

(1)　ⓒ・ⓔに用いられている音便の種類と、もとの形を答えよ。〈２点×２〉

ⓒ〔　　　　音便〕〔　　　　　　　〕

ⓔ〔　　　　音便〕〔　　　　　　　〕

(2)　ⓐ・ⓑ・ⓓの文法的意味を選べ。〈2点×3〉

ア　伝聞　　イ　推定　　ウ　断定　　エ　存在

ⓐ〔　　　〕　ⓑ〔　　　〕　ⓓ〔　　　〕

問四　チェック問題　［注意したい訳し方の助動詞③］

次の傍線部の説明として最も適当なものを選べ。〈1点×4〉

１　人のこころざし等しかなり。　　　　　　　　　（竹取物語）

２　「枝も情けなげなめる花を」とて取らせたれば…（源氏物語）

３　かく騒がしげにはべめるを、…　　　　　　　　（源氏物語）

４　かく語るをば、「こよなきなめり」と思ひやすらむ。（枕草子）

ア　動詞の活用語尾＋婉曲の助動詞

イ　断定の助動詞＋推定の助動詞

ウ　形容動詞の活用語尾＋推定の助動詞

エ　形容詞の活用語尾＋伝聞の助動詞

１〔　　　〕　２〔　　　〕　３〔　　　〕　４〔　　　〕

問五　傍線部①を、主語を補って現代語訳せよ。〈４点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部②の姉の説明として最も適当なものを選べ。〈６点〉

ア　美しい月を見ながらつい口にした言葉が妹を不安な気持ちにさせたので、ほかのことを言ってその場を取り繕っている。

イ　空を見ていたらどこかへ行きたくなってつぶやくと、妹が思いがけずさみしがってしまったので、さまざまな話題で場を盛り上げている。

ウ　冗談のつもりで死にたい思いをふと漏らしたところ、妹が本気にして取り乱したので、落ち着かせようとなだめている。

エ　尋ねて来ない恋人を夜中まで待つつらさを打ち明けたところ、妹がことのほか心配するので、努めて明るく振る舞っている。

〔　　　〕

問七　和歌Ａの「そよ」は「そうですよ」の意味である。下の句に込められた思いとして最も適当なものを選べ。〈５点〉

ア　女が男の求愛を受け入れたことへの賛美。

イ　男に女が軽々しく扱われることへの不満。

ウ　女が男の問いかけに応じないことへの疑問。

エ　男の女への想いが報われないことへの同情。

〔　　　〕

問八　和歌Ｂにおいて、姉は、笛を吹く男はどうすることが望ましいと詠んでいるのか。三十字以内で答えよ。〈７点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問九　授業で本文を読んだ生徒たちに、次のような課題が出された。その《課題》について討議する生徒たちの発言のうち、最も適当なものを選べ。〈６点〉

《課題》　「本文中で月夜の語らいにおける姉の発言に不安を覚える作者であるが、二年後に姉

が亡くなり、【資料①】のように悲しみに暮れている。【資料②】及び【資料③】を参考

にして、【資料①】中の空欄にあてはまることばを考えよ。」

【資料①】（本文の約二年後）

姉なる人、子生みて亡くなりぬ。よそのことだに、幼くよりいみじくあはれと思ひわたるに、まして言はむ方なく、あはれ悲しと思ひ嘆かる。（略）形見にとまりたる幼き人々を左右にせたるに、荒れたる板屋のひまより月のもり来て、児の顔にあたりたるが、いと　　　おぼゆれば、袖をうちおほひて、いま一人をもかき寄せて、思ふぞいみじきや。

【資料②】（本文の約一年前）

（作者は上京の途中で出産のため別行動をとっていた乳母に会いに、荒れ果てた家屋を訪れた。）

　（乳母が）うちなやみて臥したる月かげ、（略）いと白く清げにて、（乳母が）めづらしと思ひてかきなでつつうち泣くを、（私は）いとあはれに見捨てがたく思へど…

【資料③】（本文の約四か月前）

その春、世の中いみじうさわがしうて、まつさとの渡りの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。

ア　生徒Ａ―「月光」に着目してみると、作者は【資料②】で「月かげ」の当たる乳母の姿を「いと白く清げにて」と評している。月光に照らされた子どもの美しさはかつての姉や乳母と変わらないということで、「めでたく」のようなことばが入るんじゃないかな。

イ　生徒Ｂ―そうだね。【資料③】でも【資料②】の頃の乳母の様子を「月かげあはれに見し」と表現していて、月光に照らされた姿に作者は情趣のようなものを感じているんだろう。だから、全ての資料に見られる「あはれ」と同義の「をかし」といった趣深さを表すことばが適当だと思うな。

ウ　生徒Ｃ―でも、そうした姉や乳母も、【資料①】【資料③】で「亡くな」ってしまっている。そう考えると、残された子どもの顔を照らす月光は不吉なものだと言えるし、【資料①】の「袖をうちおほひて、いま一人をもかき寄せて」という作者の行動から考えても、「ゆゆしく」がぴったりだと思う。

エ　生徒Ｄ―そうそう。さらに言えば、姉や乳母という近しい人を亡くして作者は喪失感でいっぱいだから、【資料①】の「荒れたる板屋」、【資料③】の「せむかたなく思ひ嘆く」といった表現に共通する、虚無感を表す「むなしく」のようなことばがいちばんいいよ。

〔　　　〕

【解答】

問一　姉／夜中／月／車／笛／姉／明け

問二　㋐＝物思いに沈んでぼんやりと見る　㋑＝本当に〈４点×２〉

問三　(1)　ⓒ＝撥音便・ざるなり　ⓔ＝イ音便・あかし〈２点×２〉

　　　(2)　ⓐ＝ウ　ⓑ＝エ　ⓓ＝イ〈２点×３〉

問四　１＝エ　２＝ウ　３＝ア　４＝イ〈１点×４〉

問五　私が行く先もわからず飛んで行って消えてしまったならば、あなた（妹）はどう思うだろ

うか。〈４点〉

問六　ア〈６点〉

問七　ウ〈５点〉

問八　その場に留まって、荻の葉が返事をするまで笛を吹き続けること。（30字）〈７点〉

問九　ウ〈６点〉

【現代語訳】

月がたいそう暗い所がなく明るいときで、人々も寝ている夜中ほどに、縁側に出て座って、姉である人が、空をしんみりと物思いに沈んでぼんやりと見て、「たった今（私が）行く先もわからず飛んで行って消えてしまったならば（あなたは）どう思うだろうか」と（姉が）尋ねるので、 なんとなく不安だと（私が）思っている様子を （姉が）見て、他の事に言いまぎらわせて笑ったりして（外の様子を）聞くと、隣にある所（家）に、先追い（をさせている）車が停まって、 「荻の葉、荻の葉」と（お供の者に）呼ばせるが（荻の葉は）答えないようだ。呼びかねて、笛をとてもすばらしく心を込めて吹いて、過ぎてしまうようだ。（私が、）

　　　笛の音がまさしく秋風に乗せた秋風楽のような風情ある音に聞こえるのに、どうして荻の葉は「そよ（そうですよ）」とも返事をしないのだろうか。

と言ったところ、（姉は）本当にと言って（おきながらも）、

　　　荻の葉が返事をするまでも（笛を）吹き（続け言い）寄らないで、すぐに過ぎてしまった笛の音は冷淡であるよ。

　このように（話しながら）明るくなるまで物思いにふけりながら夜を明かして、夜が明けて皆

は寝た。

【資料】現代語訳

①　姉である人は、子どもを生んで亡くなってしまった。他人のことでさえ、（人の死は）幼い

ときからたいそう悲しいことと思っていたのに、まして（姉であるので）言いようもなく、あ

あ悲しいと思い嘆息する。（略）形見に残された幼い人たちを左右に寝かせていると、荒廃し

た板屋根の隙間から月の光がれてきて、子どもの顔にあたっているのが、とても不吉に思わ

れるので、（その子の顔に）袖をかぶせて、もう一人（の子）をも引き寄せて、（あれこれと）

思う気持ちは何とも悲しいことだ。

② 　（乳母が）苦しそうに横になっている月の光に、（略）たいそう色白で清楚な感じで、（見舞いに来た私を乳母が）愛おしがって（私の頭を） でながら泣くのを、（私は）たいそうであとに残して帰るのは忍びがたく思うのに…

③ 　その（年の）春、（疫病の流行で）世間がたいそう騒がしくて、松里の渡し場で月の光に照らされた姿を見てつくづくきれいだと思った乳母も、三月一日に亡くなってしまった。どうしようもなく思い嘆いているうちに、物語を読みたいという気持ちも起こらなくなってしまった。

【補充問題】

問１　和歌Ｂで、Ａの歌を受けて、意味を変えて用いている語句を答えよ。

問２　本文の内容に合致するものを一つ選べ。

ア　姉は、かねてから浮世に嫌気がさしており、命を絶つことを決心した。

イ　男の笛の音は、情趣を誘うものではあったが、少し気取っていた。

ウ　作者は、荻の葉に気持ちが届かず帰る男を、同情しながら見送った。

エ　月の明るい夜、作者と姉は縁側に出て、物思いをしながら語り合った。

【補充問題解答】

問１　ただに

問２　エ